



座談会

「地域活動」と「地域プライド」

～地域の今を支え、未来につなぐ～

(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

当協会では、北海道内の地域活性化活動に取り組む諸団体との「地域活動ネットワーク」構築を目指し、令和7年10月29日に札幌市内で、地域の活性化に向け活躍される方々にお集まりいただき、日々の活動で感じる「地域プライド」をテーマに座談会を行いました。



開会あいさつ（開発調査総合研究所）

本日は、地域活性化に取り組む方々にお集まりいただき、「地域プライド」をテーマにディスカッションを行います。北海道は過疎地域が多く、民間企業の力も弱いため、地域活性化のための非営利活動が益々重要になっています。多様な活動は個々に展開されていますが、「地域を良くしたい」という想いは共通であり、地域活動のネットワークが広がることで、今後、各活動団体が相互に刺激を受け合うことになれば喜ばしいと考えています。

本日のコーディネーターは、札幌市立大学デザイン学部准教授の片山めぐみ先生にお願いしております。よろしくお願ひいたします。

片山 めぐみ（札幌市立大学デザイン学部准教授／社会福祉士／2級建築士／コーディネーター）



私は、臨床的に人とコミュニケーションをとりながら、「人や地域の潜在的な何かが花開く瞬間」をコーディネーションするコミュニティデザインや、まちづくりを専門にしています。自身もNPO法人を立ち上げようとしており、地域活動を「自分ごと」として伝播させていかな

ければならない状態です。本日は皆様と同じ目線に立ち、お話をさせていただければと思います。

早速、自己紹介を兼ね、個々の取り組みと地域への想いについて、佐藤さんからお願いします。

【地域活性化に関わる取り組みと地域への想い】

佐藤 太紀(株式会社エフエムもえる代表取締役社長)



留萌に戻った当初、都市計画マスター プラン策定などの市民会議に参加しましたが、「あれが欲しい、これが欲しい」などの主張が多く、結局「行政が悪い」という縮図が目立ち、あまり発展を感じられませんでした。根本的な課題は、「地元の意識改革が必要」で、地域のことが「自分で事化されていない」のではないかと気づきました。

そこで、自分が地域に関わっている「実感」を得る手段として、ラジオ局「エフエムもえる」をスタートしました。地域に何もないという人は、何も知らないことに気づいていない。人に伝える方法を与えることで、自分で気づきが得られ、まちづくりの一環として、主体意識を持った市民を一人でも増やす仕組みとして考え、30代前半のころにボランティアから始めていました。

地域課題を明確化し、人の集まる場ができたことで、次に考えたのは「外からの評価」を得て、「お金をもらう」ことです。この二つの視点から観光に着目し、外部からの情報とお金をエンジンとして旅行会社を立ち上げました。この二つのエンジン（内部の情報循環／外部からの情報・お金）を掛け合わせることが、良いまちづくりにつながっています。現在は、全員が生産者として動くわけではないため、市民も含め地域の人にお金を使ってもらう「消費人口」を作ることにも取り組み、外からのお金を呼び込むため、観光だけでなく一次産業も含めた商品開発を進めています。

菊池 吉史（くしろ元町青年団団長）

釧路市の厳島神社で神主をする家系に生まれ、高校まで釧路で育ち、大学時代は東京に出て観光学を学ん

でいましたが、今は釧路に戻り神主をしています。

地元に戻った際、釧路は魅力があるものの、「地域に若者が半減」し、歩いていても若者は私しかいない状況でした。「自分がやらないと誰もやる人がいない」と勝手に燃え上がり、2015年に「くしろ元町青年団」を立ち上げ、現在は17名で活動しています。

活動の軸は、シビックプライドの醸成と、若い人たちが過ごしたくなるまちづくりです。活動は、健康とコミュニティづくりを兼ねた「ゆるラン」や、地域の方に案内してもらいまちを楽しむ「フットパス」を長年続けています。フットパスを通じて、地域住民も元気になってくるというメリットがありました。

人々、観光業への関心から、クルーズ船で来航する外国人向けに日本文化を伝える「神社仏閣ツアー」を行っています。また、「元町お寺食堂」を2か月に一度、お寺の大広間で「地域の居間」というコンセプトで運営し、子供100円、大人300円で食事を提供していく、毎回200～300人が集まります。参加する一人暮らしの高齢者が「ここが私の居場所だ」と言われるなど、元気の源にもなっています。

地域の課題として「地域の人が地域の魅力を知らない」という点があり、まず元町MAPの作成を通じ、地域の方々に地域の魅力を知ってもらい、郷土愛を育むことに取り組んでいます。

坂本 純科（NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト理事長）

札幌市役所で公園の設計や工事の仕事に13年間携わり、使い手と一緒に設計したり、造ったりすることにモチベーションを感じ、子どもや高齢者、障がい者施設の方々と一緒にデザインをしていました。しかし、行政の仕事は所管ごとに対応が分かれ、高齢者や子どもたちの日常的な課題にアクセスできないと、限界を感じ、2004年に退職しました。

NPOの活動がなかなか自立せずに悩んでいた当時、ヨーロッパのエコビレッジを知りました。各地を訪問し、食、住まい、エネルギーなどを自給する暮らしを通じて社会課題を解決するコミュニティの価値に感銘を受けました。2009年から北海道で活動を始め16年になります。

エコビレッジが地域で生き残るには、自分たちだけ閉じるのではなく、「地域に信頼され貢献する」ことが不可欠だと考えました。初めのころは新興宗教と疑われたかもしれません、近所の農家の手伝い、道路の清掃、神社の草刈り、祭りの準備といった地域貢献を続けた結果、今では農業委員や町内会の役員を務めるまでに信頼を得ています。

出身地の本州でなく、北海道を選んだのは、エネルギーや食の自給がスケール的に夢ではないこと、そして本州では文化やふるさとは「守る」という要素が強いのに対し、北海道は「クリエートする伸びしろがあって、新しい人たちにも抵抗感が少ない」という文化的な特徴があったためです。

【活動を通じ発見した地域プライド】

片山 自身の活動や取り組みを通じ、発見した地域プライドについて、菊池さんからお願ひします。

菊池 私たちが地域のランドマークと呼んでいる「弁天ヶ浜」には、石炭列車が94年間走っていましたが、2019年に廃止され、ある日突然、踏切と警報機もなくなりました。地域の高齢者から何とかして欲しいと言われ、モニュメントとして復活させるプロジェクトを立ち上げましたが、復元に100万円かかると言われ、クラウドファンディングではなく、地域の会社や個人から寄付を募り160万円ほど集まりました。

今は観光客も集まる「映えスポット」になっていますが、この経験から、誰かが旗振り役をやれば、多くの人から応援していただき、結果が伝播していくことを実感しました。募ったお金の一部を使い、テーマソング「つなぐ道」を制作しました。作曲は、釧路市の著名なジャズピアニスト木原健太郎さんにお願いしました。私たちの熱意が伝わり、毎日、弁天ヶ浜に通われインスピレーションを高めて作曲をされています。

地域の小学校で生徒たちに聴かせたところ、保護者が参加する中、少し大きな体育館で子どもたちが歌うことになり、地域の魅力が詰まった歌を子どもたちが

歌うのを聞いたとき、地域のプライドが醸成された瞬間だと感じました。この取り組みはNHKでも特集され、釧路市役所で朝のテーマソングとして流れています。

片山 ありがとうございます。では坂本さん。

坂本 余市町は、ニッカウヰスキーはもちろん、最近はワインで賑わっています。もっとも、高価なワインを喜んだり、イベントに参加したりするのは東京など都市部の人で、まだ地元のものになりきっていないという印象を持っています。理想的な観光は、「町民の楽しみや誇りをお裾分けする」スタイルにあるのではないでしょうか。たくさんある魅力の中で、私は密かに「りんご」にプライドがあると思っています。明治から引き継ぐ伝統のりんごを農家と協力して増やし、お菓子に商品化しました。商品は、札幌の店舗と北大マルシェの2か所しか置いていません。ふるさと納税の返礼品にはなりませんが、りんご農家や地元の人が「地元の良いものを紹介してくれてありがとう」と感謝してくれたことに驚きました。町の人がどこにプライドを持っているのか、もう少し掘り下げてみないと分からないと感じています。

片山 エコビレッジでもワインを作られますか。

坂本 作っています。余市町は、ワイン特区の認定を取っているため、製造免許のハードルが低く、地域には小さなワイナリーが20軒以上あります。

片山 わかりました。続いて、佐藤さん。

佐藤 ラジオの立ち上げ時には、はじめ10人ほどのボランティアメンバーが集まりました。放送や運営を支えるボランティアパーソナリティは、今でも100人ほどいますが、「ボランティア」はタダということではなく、自由意志という意味で取り組んでいます。

やって良かったと思うのは、「成功体験」や「実感」を共有できたことです。自信なさ気にスタジオに入っても、番組が終わって、出てきたときにはとても誇らしい表情になります。自己実現と行動に裏付けされた自信だと思います。また今は亡くなられましたが、当時85歳のボランティアパーソナリティは、番組がない日も雑巾を洗って持ってきてくれて、「自分がここにいることで、地域の一員だという実感」を得ていました。



観光体験でも農家さんが子どもたちを半日受け入れ、別れ際に涙ながらの交流が生まれ、子どもたちが「体験ができて良かった」と話すことで、農家さんが「我々のプライド」を実感します。

現在、道の駅の駅長も務めており、昨年は38.9万のお客様と1.3億円の売上がありました。町の商店も「あそこなら稼げる」という希望を持ち始め、この「希望の伝播」が非常に重要だと感じています。

【地域活動においての重視されること】

片山 皆さんの取り組みもお互いに分かってきたところで、地域活動で重視されることを教えてください。

坂本 さまざまな人が多様な形で関わる「グラデーション的な仕組み」を大切にしています。また、夢のブレインストーミングで終わらせず、「形になったものをみんなでシェアする」ことも重視しています。

地元住民とは、オーガニックや気候変動といった自分たちのテーマを押し付けず、共通の課題解決を通じて親しくなるようにしています。ゴミステーションのマナーや農業の担い手、祭りの運営といった共通課題と一緒に関わることで、時間をかけて信頼を得ることができました。

佐藤 いろいろな方と一緒に絡んで取り組むだけではなく、「その気になってもらう」ことが重要です。そのためには、感動体験や成功体験、希望など、いかに「それっぽく見せるか」を考えます。行動については、「とにかくやってみよう。やりながら考えましょう」という姿勢と、「飽きてもやる」という継続が大事です。

建設業の体質から大枠で物事を俯瞰する視点と、土質や天候など現場の状況で対応する、「やりながら考える」姿勢が身についていると思います。

片山 建設業の良い所は、想定や計画はしますが、割と現場で変わります。やりながら考えることも大事かと思います。次に菊池さんお願いします。

菊池 市民団体として、「自分たちが楽しそうに、ワクワクしながらやること」を大切にしています。楽し



そうに取り組むことで、周りの人から「何か手伝えることはないか」と興味を持っています。

活動を持続させるため、核となる17名以外にも地域には「やりたい人」がいて、例えば、お寺食堂は「お寺食堂実行委員会」として、お寺や社会福祉協議会、地域包括支援センターなど、さまざまな団体を巻き込み、「みんながWIN-WINな感じ」になる仕組みを作りました。これにより自分たちの負担も減り、持続可能なイベントになっています。「やりたい人を巻き込める仕組み」をしっかり作り上げることも重視しています。

【情報の発信】

片山 地域からの情報の発信にはどのように取り組んでいますか。

佐藤 「情報の受発信」と呼んでいますが、ボランティアのボランタリーな気持ちで寄せ集めた地域情報を、皆さん自身が発信する構造です。

ラジオ以外の発信にはSNSはもちろん、「オールドメディア」も積極的に活用し、特に新聞や地域ラジオはかなり効果を感じています。地元紙やNHK支局には、毎回投げ込みを行い、毎月2~3回は新聞に載るよう取り組んでいます。人は複数の情報源から聞くとそれが本當だと感じるそうです。

ボランティアパーソナリティは、基本的に誰でも受け入れ、内容の検閲もしません。言ってみれば憲法による言論の自由です。ただ、喋ったことに対する責任や自分が振る舞ったことの言論に関しては「自分で責任を取る」ということをセットにしています。これも自分事化の一面だと捉えています。

市民ボランティアパーソナリティは、「自分も地域の一員だという実感」を尊重しています。プロアナウンサーではありませんから、そこに関する苦情には「その時間は他局をお聴きください」と答えています。

菊池 鈎路全体の情報発信ではなく、「元町エリアと勝手に定めるエリア」に絞り発信することが、情報が刺さっている要因だと思っています。

イベントの情報発信では、「いかに参加ハードルを低くするか」を工夫し、SNSでは敬語を使わずカジュアルな言葉遣いを心がけ、「行ってみようか」と思え

る文章にしています。メッセージも「釧路全体を盛り上げるためにも、元町地域から釧路を盛り上げよう」と地域を絞ることで、元町と関係のない人も興味を持ち、「自分の地域でも真似したい」と人が集まるなど、絞る作戦がうまくいっています。

片山 元町地区は、釧路発祥の地（佐野碑園）があつたり釧路地域の人にとって歴史的な地域ですね。

菊池 私が戻ってきたとき、釧路市が作った地図には元町エリアが描かれておらず、釧路発祥の地を誰も語れない状況でした。学校でも釧路発祥は、教えてくれません。釧路の魅力が元町エリアに詰まっています。

片山 目の付け所がいいと思います。

坂本 講座やイベントの周知は、FacebookやInstagramといったSNSがメインです。以前、たくさんの人々に来て欲しいと思って、一般サイトに掲載した時期もありましたが、資源を節約する、ごみを出さない、というエコビレッジの価値観を共有してもらえないお客様が増えたので、現在はコミュニティやオフグリッドに興味がある方に絞るよう心がけています。

また、地域のイベントは、SNSが届きづらいため、回覧板など「足を使う」、アナログの手段に頼ります。

【未来へつなぐ地域のプライド】

片山 次は、「未来へつなぐ地域のプライド」がテーマです。ご自身の地域への想いをお話しください。

菊池 未来へつなぐには、自分たちが「楽しそうに地域活動に取り組んでいる様子を若者に見てもらう」ことが大切です。「地元って捨てたもんじゃない」と思ってもらえる形を見せることで、今後、若者が自分たちなりに楽しく地域を盛り上げるにはどうしたら良いかを考え行動を促すことで、釧路のまちが未来に続いていくと考えます。

釧路公立大学の学生から「くしろ元町青年団」を卒業論文のテーマにしたいと言われ、メンバー17名がヒアリングを受けました。釧路市元町の魅力について、景色や歴史などを洗い出し、「元町青年団の人たちが地域資源」と結論づけています。活動する姿を若者に見せることが、次世代にもつながると実感しています。

片山 自らが灯台になっていますね。次に坂本さん。

坂本 地域資源を地元の人たちだけで受け継ぐのは難

しいと考えており、「外から来る人たちとのやりとり」を重視しています。一方的にサービスや情報を提供するのではなく、外の若い力や情報を地元に還元し、お互いに学び合うことが肝だと思っています。

地域資源を素材にしたプログラムを通じ、外の人が余市のファンとなり、リピーターや収穫ボランティアになるなど、半町民的な関わりが増えていくことが重要です。移住者を増やすだけでなく、都会の人たちが得意なことで貢献してもらい、「第2の故郷」として心の支えになる場所を持つ「共生」の形が、地方の小さな自治体の生き残る道かと感じています。

佐藤 まちづくり活動が拡大した今、志の高い人ばかりが相手ではありません。裾野を広く人と関わるために「楽しくお金を使ってもらうという関わり方」も重要なっています。

一つの指標として、「地域へどのように投資を呼び込むか」。モンベルや新たなホテル建設といった投資（外貨）を呼び込むことで、雇用が生まれ、消費人口が増え、土地の資産価値が上がっていきます。これから転換期には、「地域の資産価値」の向上と「住民機運の押し上げ」を両方やっていかなければなりません。「ここなら頑張れるという希望の伝播」がシックプライドにつながります。

お金は単なるツールですが、地域を持続させるためには不可欠です。シックプライドを保つためにもお金は必要であり、地域全体の価値が上がっていることを皆と共有していきたいと考えています。

また建設業は、公共投資という「外からの投資（外貨）」を呼び込み、同時に生活基盤や生産空間をつくることで「地域の資産価値を上げていく」役割を担っています。代々地域に根差し地域をよく知る建設業は、地方部経済の柱として重要と感じています。



片山 地域にお金を落とす意味での応援金みたいなことでシビックプライドが強まるとしたら、そこも循環の内のエンジンと外のエンジンの歯車が合わさることになりますね。

皆様からいろいろな話題が出たところで、お互いにご質問があればお話ください。

【意見交換】

佐藤 私は、道外には7年しか暮らしたこと�이ありませんが、本州ご出身の立場から北海道は文化を作ることに抵抗がないと感じますか。

坂本 本州では先祖代々築いた伝統・文化は、そのまま保存すべきという感覚があり、なかなか変えることができません。北海道は、新しい文化をクリエートする伸びしろがあります。

片山 背負っているものもいろいろありますね。

坂本 北海道では「スクラップ・アンド・ビルト」するとも言われますが、地域の「古い方」の知識と歴史を尊重し、それを土台に新しい価値を築こうとする姿勢が成功の鍵です。エコビレッジでは、修学旅行生を受け入れていますが、地元の歴史や一次産業を教材に、現代の課題や未来の姿を描くワークショップを行っています。また、お弁当改革にも力を入れました。余市町は米も野菜も魚も肉も、ほとんどの食材が揃い、それだけの食の資源がありながら予算上、海外や他町村の冷凍食品を並べた700~800円のお弁当が一般的です。そこで、「学びの一環」として学校側に理解を求める、環境負荷や生産者の努力を伝える教育プログラムとして、オール地元食材・プラスチック不使用の「学びの弁当」(1,500円)を提案しました。食材に関わる背景を子どもたちに語ることで、机上のプログラムよりも圧倒的に強いメッセージが伝わっています。

また、幻のりんごの事例のように、地元住民が「当たり前」すぎて気づかない価値を、外から「褒め」、新しい形(お菓子)でフィードバックすることで、農家の方々の誇りや、りんごの歴史を調べるなどの探究心を呼び起こしました。この「外からの賞賛」が、地域が持つ潜在的な力を引き出す重要な機会となっています。

片山 道産子としてそういう軽やかさを感じつつ、逆に「故郷に錦」みたいな気持ちはあまりない。さと

止めてしまえる。故郷があることが、苦しくても歯を食いしばって続けることにつながって、ある意味重いけれども自分の糧にはなりませんか。

佐藤 ラジオ局や旅行会社の設立の際は、親から反対されました。自社(建設業)にとって直接的な利益は少くとも、「地域に新しい投資を呼び込む」仕事はできました。

片山 脈々と続く神社にとって、今回のことでのファンができ、「故郷に錦」にならぬませんか。

菊池 神主をするだけでなく、神社を町歩きのコースに入れたり、元町MAPに入れることで、関わりができます。MAPは英語バージョンを作ったことで、外国人も増えています。

佐藤 お寺と神社の関係はどうですか。

菊池 お寺とは仲も良く、明治期に本州の各地域から移住した際、各宗派のお寺と神社が並びあって建てられています。今は、一緒に地域を盛り上げていこうとしていますし、地域づくりは神社もお寺も地域のためにやるべきことだと思います。

佐藤 私より10歳ぐらい若いお寺の住職がいて、彼は留萌JC出身で、音楽合宿を全国から呼び込む取り組みで内閣府特命担当大臣賞を受賞しています。ときどき、まちづくりはお寺の仕事じゃないと冗談まじりにいって、昔から神社仏閣は地域の中核で、あまねく民の魂を救うのが使命なわけだから、むしろ本分なのでは?と話しています。

【まとめ】

片山 佛教用語に自灯明^{じとうみょう}という、自ら灯となり民を率いるという言葉があります。前例がないことをするときは、自分が灯台になって住民も自分も引っ張っていく心意気が必要ですね。

自分の思いと地域社会の目指すところを一致させてぶれさせないことが大事です。でもそれを真面目にならぬ、でも不真面目にもならぬ、両方を行ったり来たりしながら周囲を巻き込んでいくのが我々の技だと思いますが、ぜひそういうことを広げていきたいものです。改めて私もNPOの立ち上げ途中ですが、力づけられた感じがします。

本日は、長時間にわたりありがとうございました。